THE PORTRAIT OF A LADY における人間像

—— HENRY JAMES の作品研究（I）——

江　口　裕　子

I

アメリカ文学の古典的作品のなかで、女性をヒロインとした作品といえば，だれしもまず，Hawthorne の *Scarlet Letter* をあげるだろうが，James の *The Portrait of a Lady* は，*The Scarlet Letter* にもまさるともおとらぬ傑作として，アメリカ文学中のみならず，世界文学の古典として残されるべき作品であろう。古来、偉大な作家によって生み出され、古典文学のギャラリーにかかげられる女性像の数は少くない。Tolstoi の Anna Karenina, Flaubert の Emma Bovary, Maupassant の *Une Vie* の Jeanne, Hardy の Tess, Brontë の Jane Eyre など，それぞれの性格と運命に色どられた数々の女性像のなかで，James の *The Portrait* のヒロイン，Isabel Archer の肖像は，二十世紀の James 再評価の機運とともに，改めてヴェールをのぞかれ，その麗姿を現わした感がある。これらの数多くのヒロインの中でも，Isabel ほど James が彼女にあたえた "Lady" という名にふさわしく，知的な優雅さ，毅然とした精神の高貴さとで，私どもを魅了する女性はいないように思われる。*Scarlet Letter* の Hester Prynne は，陰欝で峻厳な十七世紀の清教徒たちの社会のなかで，もち前の強烈な個性と，ゆたかな人間性を生かす術もなく，罪の烙印を一生負いつづけたヒロインとして、二十世紀の読者には，いささか親しみにくい人物であるのに反して，*The Portrait* の Isabel がより身近に感じられるのは，彼女が *Et dukkehjem* の Nora に通じる，明確な自己意識をそなえた近代的女性であり，自分の知性と意志とをたのみとして，わが道をゆく主体的人間だからである。大方の作品のヒロインは，純真で，世間の裏表や，人間の醜悪な面を知らず，未知の世界にむかって、ばら色の夢や希望をえがいているが，大ていは男性との邂逅によって運命を左右され，情熱に身をゆだねることによって，不幸におちいり，または身の破滅を招いている。彼女らのあるものは，美貌や成熟した肉体のなかに，背徳や凋落の影をしのばせている。またあるものは，無知で自己をもたぬために，自分以外の力に翻弄されて，力

を消耗しつくしたあげく，忍従と静かなあきらめの中に沈潜してしまう。Isabel のたどる運命もその点では例外ではない。彼女も，Emma や Jeanne のように，純真さと善意にみち，人間や人生に対して無限の可能性を夢みている，ローマン的な理想主義者なのだ。が，彼女が一たん，観念の世界から現実の社会へ足をふみ出したとき，彼女は容易に世間の悪人たちの策謀のとりことなってしまう。しかし，この物語が *Madame Bovary* や *Anna Karanina* とちがう点は，情熱の悲劇ではなく，知性の悲劇だという点である。Isabel が他のヒロインに比べて，その悲劇的な運命にもかかわらず，結末でみじめな敗北感をあたえず，凛乎とした勝利感をもって読者に訴えかける所以は，彼女がいかに強靱な精神力と，一貫した倫理意識をもって，彼女の運命に対処したかという，その態度によるのである。彼女が，James が *The Porirait* の序文でいっているように，運命に翻弄される女性ではなく，「敢然と運命に対抗する」女性だからである。Isabel のように主体的な人間の場合は，彼女の運命の鍵は他人や外的な環境のなかにある以上に，彼女自身の性格の中にあるといえる。彼女は自分に分っている限り、無抵抗に運命に引きづられるのではなく，つねに自分で選択するからである。すなわち，彼女の運命は，なかばは，彼女自身が作り出すのである。彼女は読者に，「あなたは私を環境の生んだ子だと思うでしょう。ところが私は，自分の環境をつくるのです」という。この自負にみちた言葉がどの程度真実であるか否かはとも角として，彼女が自分の不幸な「運命に対抗する」ということは，彼女の場合には，常に自己に立ちもどり，自己に問いかけ，自己とたたかい，自己と環境を超えてゆくことなのである。その点で，Isabel は勇敢で，自分自身に対し，環境に対して責任感を貫くのである。Isabel は他のヒロインと同様，悪徳のためにくいものにされた純真さの例であるが，同時に，彼女自身の自我と知性の犠牲になった例でもある。しかし，彼女は自分を悪徳の単なる犠牲者として終らせない。苦い「智慧の実」を味わった体験を土台として，現実の不幸と苦悩をうけいれ，毅然として生きづつける決意をする。この受苦の精神，運命にたえ，自己を超えようとする不屈な精神力という点で，Isabel は Hester Prynne の姉妹であり，作品の結末における彼女の決意——悪魔的な夫 Osmond のもとに帰る決意は，彼女の姿をいわば殉教的な円光のなかに輝かせるのである。そしてまたこの物語は，自由や，独立や，知識を愛し，自己の主体性を重んじ，人間の善意や正しさを信じて，より完全な生き方を求めようとしたアメリカの娘が，ヨーロッパ化した教養人で，しかも背徳的な Osmond との結婚によって，挫折のうき目にあう

という物語なのだが，これはいいかえれば，Emerson 時代のアメリカ人の，楽天的で，ローマン的な理想や，価値観念が，ヨーロッパの根づよい伝統や，慣習というひき臼によってひきつぶされるという悲劇の一例でもある。要するに，James の *The Portrait* は，一人の女性の性格と運命をとりあつかったドラマであるのみか，James 自身にとって生涯の課題であった，アメリカ対ヨーロッパの価値の対立という普遍的なテーマを含んだ力作であるという点で，出版後八十余年たった今日も，尚その説得力を失わない。

II

The Portrait は，James の生涯を大体三期に分ければ，いわゆる「国際的主題」を開拓した第一期の終りに書かれた作品である。この作品のなかには，後年になって James が円熟完成の域に達した緊密な建築的構成，「視点」Point of View や象徴による技法，意識の流れを追う微妙な心理描写，人物の内面的真実を執拗にほり下げることによって，小説に迫真性をあたえる手法などが，すでに十分その萠芽を示している。

The Portrait は 1880 年十月から一年二ケ月にわたって，イギリスの *Macmillan's Magazine* と，アメリカの *Atlantic Monthly* に同時に掲載されて，太西洋の両岸に James の文名を輝かせることとなった。この頃，すでにコスモポリタン作家として，本国をはなれていた James は，1880 年の春，Florence の Hôtel de L'Arno で執筆にとりかかったが，この作品の構想は Leon Edel によれば，すでに 1878 年までには，彼のなかでほぼまとめあげられていたものである。彼のこの作品に対する期待と自信が，相当なものであったことは，前年の十二月，兄の William にあてて，「来年私の書く小説は，大したものにしようと決心しています」と書きおくっていることや，また母への手紙で，「この小説は，お母さんを名誉でおおうでしょう。今こそ静かな外観の下に埋もれていた強大な野心のヴェールを脱ぎ去る時です云々」とのべている言葉によっても十分うかがわれる。とりわけヒロイン，Isabel Archer のイメーヂは，多年にわたって，深い愛着をもって育て上げられていたもので，このヒロインの肖像に焦点をあてて，特にその意識の展開を描くことを主眼として書きすすめられたものである。

James のすぐれた作品の中には，女性を主役として描いたものが多く，*Daisy Miller* をはじめ，*The Portrait* の Isabel Archer，*The Wings of the*

Dove の Milly Theale など不朽の女性像を創造しているが，これは James が繊細鋭敏な，女性的な性情の持主であったことや，その生活態度が観照的，受動的であって，一般男性の活躍舞台である政治や実務の社会から遠去かっていたことが，タフで斗争的な男性の世界を描くことより，より優美で，繊細な女性を描くことを得手とさせたのであろう。

Isabel というヒロインの創造に関しては，多くの批評家は，この物語は彼に少なからず影響をあたえた George Eliot の作品，*Daniel Deronda* から示唆を得たもので，Isabel のプロトタイプは，この作品中の Gwendolen Harleth であり，彼女の夫 Gilbert Osmond は Grandcourt であって，彼の洗練された，しかし非人間的で酷薄な性格も Grandcourt のそれと一致するという説を認めているが,[1] また W. C. Brownell のように，同じ Eliot の作品の中でも，Isabel と Osmond の関係を，*Midllemarch* の中の Lydgate 夫妻からヒントを得たものとする解釈もある。[2] これらの解釈はおそらく半ばは真実であろうが，James の中で，Isabel 創造のもっとも深い源泉となったものが，青年期の彼に忘れ難い印象をのこして二十四才の若さで死んだ，いとこの Minny Temple であったことは，ほぼ疑いえない事実であろう。

Minny Temple は 1865年，James が，父方の叔母の婚家先の Temple 家を Newport に訪れたときは，二十才たらずの潑剌とした少女であった。彼女は物ごとに対する生き生きとした知的関心と，鋭敏な感受性と，人生への熱意をもった女性で，Temple を訪れた若い人々のサークルのヒロインであり，男性たちの讃美の対象となっていた。その知的で清新な魅力は，後年 James をして，"a disengaged and dancing flame of thought" と回顧させるていのものであった。性来の内気と，当時病弱に悩まされていた James は，彼女に心をひかれながら，他の男性のように，彼女に積極的な友好を求めることをせず慎しみ深い沈黙と，ある程度の距離を保ったまま，純潔の女神ダイアナを見るように，畏怖の念をまじえた憧憬の念をもって彼女を見まもっていた。James は，一座のヒロインであった Minny に対して，彼自身がヒーローの役割をつとめるにはあまりにも消極的，内攻的であって，蔭の役者，誠実な観察者にすぎなかったのが実情であった。

James は，1869年二月に，ヨーロッパに旅立つことになり，Minny に別れを告げるために Temple 家を訪ねたが，この会見が彼にとっては，彼女を見た最後となった。Minny は，この頃すでに胸を病んでいて，決して軽視できない健康状態であった。が彼女は，常にかわらぬ屈託なさと，気軽な態度で，

Jamesのヨーロッパ行きを祝福し，来年の冬はヨーロッパで逢いましょうと語り合って別れた。それから一年後の三月，Minnyの病状はあらたまり，ヨーロッパ行きの希望も叶わず，不帰の人となった。この間，二人の間には屢々文通があったらしいが，Jamesの手紙は一通も発見されず，Jamesの方はMinnyからの四通の手紙を保存していた。それらの手紙は，いづれも信頼と親愛の情にみち，友人や家族のこと，身辺の出来事，自分の病気のことなどを書きつづったものだが，あまり病気のことを思い煩っている様子も見えず，ローマで会うという想像に，ひたすら希望をつないでいたらしい気持が卒直に表現されている。また別の一通には、次のような文句も見出される。

> あなたがいらっしゃらなくてさびしいけれど，でも，あなたが元気で，たのしい目をしていらっしゃるのを思うと，とてもうれしく思います。もし，あなたが私のいとこでなければ，私と結婚して一しょに連れていって頂きたいというお願いの手紙を書きますわ。でも，実際はそうはゆきませんわね。万一そうしたら，あなたが私の申し出をうけつけて下さらないかも知れないし，それでは今よりまずいことになると思ったりして，自分を慰さめています。[3]

このように，本気とも笑談ともつかぬ口調で，Henryへの親愛の情を示している部分もあるが，これとても，いとこ同志の気のおけぬおしゃべりの域を出ないもののように思われる。しかし，彼女の死を異郷で知ったJamesの衝撃は大きかった。その直後に，母親にあてて書きおくった手紙は，彼の烈しい衝撃と，悲歎を表現したもので，その文面は，あたかも感情をおし鎮めようとするかのように，不治の病気から解放されて，永遠の安息を得た彼女のことを思い，自ら慰さめる心と，ふたたび迫る哀惜の念が相交錯していて，彼女の存在が，彼にとっていかに重大な意味をもっていたかがうかがわれる手紙である。

> Minny seemed such a breathing immortal reality that the mere statement of her death conveys little meaning; really to comprehend it I must wait—we must all wait—till time brings with it the poignant sense of loss and irremediable absence. . . Wherever I turn in all the recent years of my life I find Minny somehow present, directly or indirectly—and with all that wonderful ethereal brightness of presence which was so peculiarly her own. And how to sit down to the idea of her death!
>
> Try and remember anything she may have said and done. I have been

raking up all my recent memories of her and her rare personality seems to shine out with absolute defiant reality. Immortal peace to her memory! I think of her gladly as unchained from suffering and embalmed forever in all our hearts and lives. Twenty years hence what a pure, eloquent vision she will be.[4]

生前の Minny の生命力にみちた個性は，当時病弱で，不活発だった James にとって，心の深い所でつねに彼を牽引し，鼓舞する目標となっていたようである。しかし，彼自身がようやく身心ともに恢復にむかい，生きる力と希望をとりもどしていた一方， Minny の方が次第に衰弱して，死にむかえとられるにいたった，この二人の関係の逆転は，彼にとっては偶然以上の意味をもっていた。

It's almost as if she had passed away so far as I am concerned—from having served her purpose, that of standing well within the world, inviting and inviting me onward by all the bright intensity of her example.[5]

彼女が James を沈滞から立ち直らせて生の中にみちびき，自分はその役目を果して死の中に歩み去った，という神秘的なヴィジョンは， James の魂の中でしか実存的な意味をもたないであろう。現実の彼女に近づき，親密な関係をもつことを恐れなしには考えられなかったらしい James は，現実の彼女を喪失することによって，かえって彼女の存在の全部を，彼の心の中にうつし入れ，彼のものとすることが出来たのである。

"Twenty years hence what a pure, eloquent image she will be!"
という彼の予言通り， Minny はその後，彼を鼓舞しつづける純潔な少女のイメーヂとして，彼の心の中にとどまり，*Daisy Miller* をはじめ，*The Portrait* の Isabel や，*The Wings of the Dove* の Milly Theale のような完璧な女性像となって再現されることになったのである。十年後に書かれた *The Portrait* の中で，James は二十三才の Minny が望んで叶わなかったヨーロッパへの旅を，同じ年令の Isabel に実現させているし，Minny と同じように孤児となった Isabel を故郷の Albany から出発させている年代は，Minny の死んだ1870年なのである。

しかし，James と *The Portrait* との関係が以上のような伝記に渕源があったとしても，前述の批評家たちの解釈をくつがえすことにはならず，また Isabel の肖像がひとえに Minny の忠実な再現であるとはいい難い。Minny と

Isabel の性格の類似を指摘した女友達の Grace Norton に対して，James は

> Minny Temple については，あなたは正しくもあり，また誤まってもいます。彼女のことは僕の念頭にありましたし，ヒロインの中には，あの人の顕著な性質に対する僕の印象がかなり注ぎこまれています。しかし，それが即ち肖像とはなりません。かわいそうな Minny は，本質的には未完成でした。僕は自分の描く若い婦人をもっと完成され，みがきのかかったものにしようとつとめました。本当に実生活では誰だって未完成です。そして，そういう人物を再現しようというときに，その人の未完成な所を埋めよう，いわば，その人を正当化しようとする欲求を感ずる所に芸術の特長があると思います。[6]

と書きおくっている。

さらに，Isabel の肖像には，Minny のみならず，彼自身の投影と思われる面も多々あり，自敍伝的要素がかなり織りこまれている。たとえば，Isabel が父と共に再三ヨーロッパへ旅をしたこと，幼時，学校教育によらず，家庭教師について学んだこと，Albany の祖母の家のこと，また校則に反抗して，学校をやめたことなど，彼自身の少年時代の体験と符合している。James の父が，子供たちの個性が一定のドグマティズムによる教育のため，型にはまらぬように家庭教育をさづけ，子供に出来るだけ多くのものを見聞させ，子供自身の思考判断に責任をもたせるという方針をとったことと，Isabel の自己教育や，自主的精神を思い合わせれば，Isabel の中には明らかに James の反映が見出される。また作中で，Isabel が自由や知識について語る希望や抱負は，小説論その他にうかがわれる James の小説家としての理想に似通っているし，また Isabel がヨーロッパの由緒ある建築，絵画，史蹟等にいだく感興は，そのまま James 自身のものと見てもよい。以上のように，Isabel の性格や思想には，多分に James 自身の投影が見られるのである。要するに Isabel の肖像は，一元的な根拠を指摘するには，あまりに豊富な材源にもとづいて作りあげられた，綜合的な創造物なのである。

III

物語は，父親に死なれて孤児となった Isabel が，伯母の Touchett 夫人に見いだされてヨーロッパに渡り，London 郊外の Touchett 家に現われる所からはじまる。Isabel は，知的な頭脳と活発な想像力にめぐまれた少女で，その

敏活で，聡明な資質の故に，家族や友人の敬愛の対象となっている。知識欲が旺盛な彼女は常日頃，父の書斎の本を読みあさり，もち前の想像力にまかせて，未知の世の中のことをさまざまに思い描くのであるが，世間の暗黒面や，悪徳にふれたことのない彼女の想像は，美や，正義や，勇気や，寛容などという高尚な観念でみちていて，世の中はこのような美徳が，額面どおり評価される所だと思っている。彼女は自由や独立を愛し，この世界の出来るだけ多くのものをとらわれぬ自由な立場で見，知り，経験することを切望している。彼女はまた，自己を信ずる念がつよい，勝気な少女で，自分が正しいと思った意見や判断に従うのが最上の道であると考えている。作者 James が

> She had an unquenchable desire to think well of herself. She had a theory that it was only under this provision life was worth living; that one should be one of the best, should be conscious of a fine organization (she couldn't help knowing her organization was fine), should move in a realm of light, of natural wisdom, of happy impulse, of inspiration gracefully chronic.

また

> Isabel was probably very liable to the sin of self-esteem; she often surveyed with complacency the field of her own nature.

とのべているように Isabel にはあなどり難い自負心と，優越 superiority への強い憧れがある。しかし，実際は彼女の意見や判断は，本からの知識や，想像力にたよることが多いので，独断や自己過信のあやまちをおかすこともまれではないのである。作者は Isabel の性格を次のように定義している。

> Altogether, with her meager knowledge, her inflated ideals, her confidence at once innocent and dogmatic, her temper at once exacting and indulgent, her mixture of curiosity and fastidiousness, of vivacity and indifference, her desire to look very well and to be if possible even better, her determination to see, to try, to know, her combination of the delicate, desultory, flame-like spirit and the eager and personal creature of conditions: she would be an easy victim of scientific criticism if she were not intended to awaken on the reader's part an impulse more tender and more purely expectant.

このように，James は「もし彼女が読者の側にもっとやさしく，もっと純粋な期待の衝動をひきおこさなければ」，容易に「科学的批判」の対象となるような未熟さと危なっかしさのある，理想主義者の Isabel をヨーロッパへ旅

立たせるのであるが，彼女はいわば *The American* の Christopher Newman の女性版であり，気質にも文化的背景にも多分にアメリカ的な限界をもった彼女が，伝統のある文化や，制度慣習で成立っている旧世界の中で，何を見，どんな反応を示し，経験するかがこの作品の眼目である。

Isabel がヨーロッパで会う人物は，ほとんどがアメリカ人で，しかも本国を離れてヨーロッパに住みついた国籍離脱者 expatriate たちである。James は長いヨーロッパ暮しのおかげで，これらの特殊なアメリカ人のタイプを観察するには事欠かなかったし，また彼自身の問題としても，彼らの生態を深い関心をもって描かずにはおれなかった。Gardencourt の所有者 Touchett 氏はイギリスで一旗あげた銀行家であり，息子の Ralph は，英米の最高学府で教育をうけた，コスモポリタン的な教養人である。彼は若くして胸を病み，人もみとめる才能を生かすことも出来ず，人生の第一線から退いて，病軀を養っている青年であり，人生を試みる前に，すべての可能性を見おくらねばならぬ不幸を，一見瞑想的な静かさと，無関心と，独特な明るさでカヴァーしている。

Gardencourt へ来た Isabel の前には，二人の求婚者が現われる。一人は英国貴族の Warburton 卿，今一人はアメリカの少壮実業家の Casper Goodwood である。James は，この二人をそれぞれイギリスの貴族と，庶民的なアメリカ人の典型として対照的に描いている。前者は，端正優雅な容姿，趣味教養のひろさ，広大な所有地，十万ポンドの年金，上院議員の地位など，あらゆる第一級の条件をそなえた紳士であり，後者は，機械の発明をして，パテントもとっている有能な実業家で，Albany 以来，根気のよい求愛をつづけている，単純素朴で，頑固一徹な青年である。

Isabel は，ほとんど時を同じうして，これら二人の求婚者をしりぞけてしまう。はじめてふれたヨーロッパの自然や，豊饒な文化的遺産に魅了されている Isabel にとっては，この世界こそ自分の理想を追求するための，無限の可能性を差し出している場所のように思われる。彼女は，まず多くのものを見，経験し，その中から自ら選択すべき，ひろい人生の視野が必要なのだ。彼女には，結婚して，一人の男性に自分の運命を托することによって人生をはじめたくはない，女性がひとりで出来ることは他にもあるはずだ，という考えがあり，彼女の望む自由と独立は，結婚以外の所にあるという気がしているのである。それ故，一週間のうちに二人の求婚者をしりぞけた Isabel の感じることは，自分の信条を生かすために，力を行使しえたという一種の勝利のよろこびなのである。

病弱ないとこの Ralph は，求婚をことわった Isabel の真意が奈辺にあるかを理解し，彼女の望む所を実現させたいと思う。彼に出来ることは，死期に近い父にむかって，Isabel に多額の遺産を，彼の分から分ちあたえてほしいと願うことである。彼は父にむかって次のようにいう。「あの人は自由をのぞんでいるのです。おとうさんの遺産は，あの人を自由にするでしょう」。

このような手段で，James は，Isabel を莫大な遺産の相続人とすることによって，したいことは何でも出来る，という選択と行動の自由をあたえ，彼女にその可能性を試みさせるのである。Ralph はこの作品を一貫して，常に Isabel のよき理解者であるとともに，正しい批判者である。Ralph と Isabel の関係には，James と Minny の関係が影を投げている。Isabel を扱かう Ralph の態度は，Newport で他の男性の讃美の的になっていた Minny から身を引いて，彼女を注意ぶかく見守っていた若い James を彷彿させる。Ralph は，決して積極的な求愛者とはならないが，そのヒューマンな愛情は，波立たぬ川の潜流のように，Isabel にむかって注ぎかけられる。彼の Isabel に対する観察や批判は，冷酷な審判者のそれではなく，つねに寛容と思いやりにうらづけられている。Ralph は，作者 James の分身であって，James のヒロインに対する温情は，いつも Ralph を通してあたえられるのである。

Ralph の Isabel に対する愛は，はじめから「望みのない愛」である。人生の可能性から遮断されている Ralph は，愛に関しても renunciation の姿勢を守るが，それは Isabel が真に望んでいることを自分も望むという無私の願望にとって代られる。Isabel の望む事は，自由の可能性を試みることであり，Ralph は，彼自身の自由への想像を Isabel に托することによって，直接的な愛によらぬつつましい自己実現を願うのである。彼の想像は，限りある生の希望となっているために，Isabel の自由が失われるとき，彼の希望も挫折し，彼は死ぬのである。Ralph が，自分の想像を満足させるために Isabel に財産をあたえ，彼女を実験の具とした一種のエゴテイストであるという解釈には賛同しかねる。

Ralph が財産を分与したのは，Isabel に結婚の持参金をあたえるというような目的とは程遠いもので，むしろ反対に，彼女が金や生計のために結婚せざるを得ない破目に陥いるのをさけるためであった。それはまた，彼自身が恩恵者として Isabel の感謝や歓心を買うためでもない。恩恵者として顕われることによって，Isabel の自由な意識の上に干渉の影をおとすことは彼の望む所ではない。従って彼は，最後まで，遺産分配の秘密を彼自身の口から語ろうとはしない。

以上のように，Ralph の Isabel に対する態度は，James が彼を呼んだように，真に「自由の使徒」のそれである。彼の本意は，多くの能力の萠芽と，人生への熱意をもった Isabel に，自由独立人として，人生を試みさせたいということであり，必ずしも結婚を望んだのではなかった。しかし，莫大な財産を得た Isabel が，世の中の fortune hunter の好餌となる危険を無視した Ralph は，Isabel と同様，ロマンティックな夢想家であったという批判は免かれない。自由の理想は，作者 James の理想でもあったが，彼は現実の世界で，自由がいかに限界のあるものかを知っていた。しかし，彼は，作中の Ralph と同様，Isabel に彼の自由への想像を托し，いづれは幻滅に終らねばならぬ自由の限界をヒロインに試みさせるのである。

Isabel のその後の運命に関与して，大きな役割をはたすのは，同じく国籍離脱者のアメリカ人，Madam Merle と，Gilbert Osmond であるが，James は，この二人の悪役をおどろくべき現実的迫力をもった人間像として描きあげた。これは，James の，善と悪が判別しがたくからみ合った人間性への内観力のふかさと，凝縮された，きめの細かい描写の力によるもので，彼のえがく悪人は，単なる悪の傀儡としての観念的な人間像ではない。Osmond は，Hawthorne の創造した Chillingworth や，Pyncheon 判事のように，悪の権化ではなく，人間としての複雑さをおび，時には純粋に，時には誠実に，そして高貴にさえ見える。Merle 夫人も，Isabel を陥しいれた奸悪な女性であるのみか，人間の血肉も心情もそなえ，彼女自身も結末では哀憐をさそうような運命の女性であり，むしろヒロインの Isabel 以上に，完璧に肉体化された女性像といえるであろう。

Isabel と Merle 夫人の関係は，「視点」の手法が，この作品中，もっとも巧みに適用されている例である。Merle 夫人は，はじめて Gardencourt で Isabel に邂逅するときは，比類なく魅力的な女性であるが，これはヨーロッパ女性の粋と，教養を身につけた Merle 夫人に心酔した Isabel の心の視野にうつった像であり，Isabel が彼女に疑惑をいだきはじめるとともに，次第にその光彩を失って，一切の秘密と策謀が暴露した結末では，彼女はあわれむべき卑少な存在になり下ってしまう。Osmond の場合もこれと同様である。

James の描く国籍離脱者のタイプは様々で，変化にとんでいる。Touchett 夫妻は，全くアメリカ人気質を失ってはいないが，Merle 夫人と Osmond は，一見全くヨーロッパ化した人物である。Ralph は中庸をえた人物で，彼の中でアメリカとヨーロッパの特質は折衷されている。James は，Merle 夫人と，

Osmond をヨーロッパの知的，審美的に高度に洗練された一面と同時に，その精神的頽廃を吸収した人間のタイプとして描いた。James 自身はヨーロッパの歴史や伝統を愛し，その中でみがきぬかれた文化や芸術にふかく感応する心をもっていたが，一方，彼のなかに流れている New England 的な良心や，道徳的潔癖さは，ヨーロッパの栄光のかげにひそむ頽廃や，放恣をうけつけがたい要素として認識せずにはおれなかった。彼の作中のヨーロッパ人や，ヨーロッパ化した人物は、しばしば，この明暗の二面をあわせもっており，また，知的審美的な点では，彼らに田舎者として軽蔑されがちなアメリカ人が，最後には道徳的な優越者となる物語が多いことは，芸術至上主義者であると同時に，清潔なモラリストであった James の特質を示すものであり，彼がヨーロッパとアメリカの対照的な価値に，それぞれ公平な評価をあたえていることを示すものである。しかも，この作品で James がとりあげている善と悪，単純と複雑，真実と虚偽の対立は，生粋のアメリカ人である Isabel と，ヨーロッパ化したアメリカ人との間に具体化されているために，単なる公式的なヨーロッパ対アメリカの問題にとどまらない。James は，Merle 夫人や Osmond のような expatriate の中に，ヨーロッパの古きものの価値に心酔し，その伝統や慣習を踏襲して，外見は全くヨーロッパ化されていながら，真の意味のヨーロッパ人とはなり得ない外国人の限界というものをも批判の対象としているのである。

たとえば，Merle 夫人は，長いヨーロッパ暮しをしながら追い求めたすべての野心に敗れて，最後は故国に逃避しなければならぬ expatriate の一典型である。はじめて Isabel の前に現われた Merle 夫人は，New York の下町育ちという素性の片鱗も見えず，ヨーロッパの王族の出身を思わせるほどの優美さと貫録をそなえ，趣味芸能はもとより，ふかい人生智をも会得した理想的な女性として，Isabel を幻惑する。彼女はまた，ヨーロッパのいたる所に貴顕の人人の知己をもち，何時何処に身をおいても場ちがいの存在と感じさせない，円滑自在な社交性と，生活の技巧を身につけている。しかし，その実彼女は，ヨーロッパの人々の生活の間を流れただよっている根なし草，乃至は寄生木のような存在でしかない。彼女の社交性と，自己韜晦のポーズは，国籍喪失者の放浪性と，身元不詳性を裏返しにしたものに外ならない。Merle 夫人は，woman of the world としての粋と教養にも拘らず，根本的には，物質主義者であり，その生活態度は形式主義で，因襲的である。彼女は

When you've lived as long as I you'll see that every human being has

his shell and that you must take the shell into account. By the shell I mean the whole envelope of circumstances. There's no such thing as an isolated man or woman; we're each of us made up of some cluster of appurtenances. What shall we call our 'self'? Where does it begin? Where does it end? It overflows into everything that belongs to us—and then it flows back again. I know a large part of myself is in the clothes I choose to wear. I'v a great respect for *things*! One's self—for other people—is one's expression of one's self; and one's house, one's furniture, one's garment, the books one reads, the company one keeps—these things are all expressive.

と語って，因襲や形式にとらわれず，自己の卒直な表現を重んじる Isabel をおどろかせる。Merle 夫人は，世俗的な野心と物欲の満足を求めて，ヨーロッパ世界をわたり歩いた人生の冒険家であり，Isabel が精神的価値の開拓者であるのに対して，物質的，世俗的な価値の探求者であるという点には，アメリカ人的な気質を彷彿させるものがある。若い時の野心が大きすぎて，結局は何物もえられず，人生の大半を彷浪にすごした悔いと苦渋をかみ殺し，Isabel の若さや，無垢や，幸運をひそかに羨望しながら，彼女の信頼をたくみにあやて，奸計の中へとみちびく Merle 夫人を描く James の筆致は入念繊細をきわめていて，息づかいさえ感じとれるほど生きた人間像となっている。James は Merle 夫人の中に，Osmond の場合と同様，外観と真実のおそるべき断絶を，そして，一人の人間の中に，高い知的教養と，倫理的な卑少さとが共存しうる例を示しているのである。

Isabel の Osmond に対する幻惑は，Merle 夫人への幻惑と全く同種のものである。ヨーロッパ的なものの中に，精神的価値を追求するのに性急な Isabel にとって，この二人は，彼女の今まであった人間の中でもっとも例外的なタイプの人間なのである。

Osmond は，娘の Pansy とやもめ暮しをしている中年の美術愛好家で，職業も，地位も，肩書きも，財産も，名声もない無為の人である。彼は貴公子然とした外観，礼節ある態度，学問や芸術に対する深い造詣，洗練された趣味の持主であり，Merle 夫人と同様，いわばヨーロッパの優越性を体現しているかに見える。彼は Ralph にいわせれば，「ローマは俗っぽくなったからフローレンスで暮すという，身元不詳の，あいまいな，説明のつかぬアメリカ人」である。しかし，Isabel から見れば，Osmond は，彼女が今まで会ったことのない，もっともオリジナルなタイプの人間なのである。自由や，独立や，知識や，優

越というような抽象的観念でしかあらわされぬような理想をもった Isabel は，世俗的な野心や欲得を超越して，貧しく孤独な生活に甘んじ，精神的価値の追求のみに専心している Osmond を，彼女の理想のすべての条件をみたす「一種特別な型の人間」a speciman apart であると信じこむ。彼女は Ralph や，Touchett 夫人や，友人の Henrietta の忠告もきき入れず，Osmond と結婚することになるが，結婚後，彼女は Osmond の内にある，外観とは似ても似つかぬ俗物性と，非人間的なエゴイズムに次第に目をひらかせられ，彼女自身の人間的要求はすべて無視され，狭い独我的な彼のシステムの中にとらわれた自己を発見するのである。のみならず，この結婚が彼女の財産めあてに，夫と Merle 夫人との間に仕組まれた策謀によるもので，しかも Merle 夫人は，かっての Osmond の情人であり，Pansy の母親であることを知るにおよんで，彼女の結婚生活は，幻滅と苦悩のるつぼと化してしまうのである。

以上のように，妙令の Isabel の人生探求は，結局結婚という問題に結びつかざるを得ない。*The Portrait* は，要するに Isabel と，彼女をとりまく複雑な人間関係をとおして，結婚という問題を追求している物語だとも言える。Isabel が，二人のより誠実な求婚者をしりぞけて，なぜ Osmond のような人物を選んだかについては，Isabel の性格や，人生観や，結婚観をさらに検討してみる必要がある。

前述のように，Isabel は，端倪すべかざる理想主義者であり，知識は豊富でも人生体験に乏しく，従って彼女の人生のヴィジョンは観念的になり勝ちである。しかも，彼女は

> I can do what I choose — I belong quite to the independent class. I try to judge things for myself; to judge wrong, I think, is more honourable than not to judge at all. I don't wish to be a mere sheep in the flock; I wish to choose my fate and know something of human affairs beyond what other people think it compatible with propriety to tell me.

と Goodwood にむかっていい切れるほど，潜越ともいいうべき自尊心と，独立不羈の精神があった。こういう精神と，観念的理想主義と，未経験とが結びつけば，彼女が独断のあやまちをおかす可能性は十分あるのであり，彼女の性格と，不幸な結婚の間には，半ばは彼女自身が蒔いた種を刈らねばならぬ因果関係が存在する。Henrietta の忠言は Isabel の性格と，高尚なイリュージョンにみちた観念の世界の中にある陥穽を的確に指摘する。

The peril for you is that you live too much in the world of your own dreams. You're not enough contact with reality—with the toiling, striving, suffering, I may even say s'nning, world that surrounds you, You're too fastidious. You've too many graceful illusions. . . .

You are too fond of admiration, you like to be thought well of. You think we can escape disagreeable duties by taking romantic views — that's your great illusion, my dear. But we can't. You must be prepared on many occasions in life to please no one at all—not even yourself.

彼女の人生問題に対する見解は，この自恃の精神に貫かれており，時に不遜な唯我主義の印象さえあたえるが，それは後に，彼女が苛酷な現実に直面したときも，彼女を欺いた悪人と同等の位置に身をおとさず，毅然とした精神的優位を保たせるにいたって，その真価を発揮するのである。

彼女にとって，人生の根本問題は，心情的にも，倫理的にも，審美的にも満足をえられるような生き方を求めることであり，知識と啓蒙によって，狭い偏見から解放され，たえず完成を求めて，進歩発展することであった。結婚ということも，その要求にかなうような人間関係でなくてはならなかった。彼女の結婚観は，極めて精神的であり，禁欲的でさえある。彼女は，結婚のことをあまり考えすぎるのは野卑なことであり，粗雑で無神経な男性と結婚するくらいなら，独身で暮す方が幸せであると考えていた。彼女の望まぬ種類の求婚者をたじろがせるような冷たさと厳しさがある。Goodwood のように，直接的な男性の情熱に出あうと，本能的に恐れを感じて，しりごみしてしまう潔癖さが彼女にはある。彼女は，結婚にも普通以上の理想的な人間関係を望んだ。それは，心情と精神の緊密な結びつきによって，お互いを完成へと助け合い，高め合うことである。それは自己の世界の拡張であって，個人の自由の制約であってはならなかった。その伴侶は，彼女の "deeper rhythm of life" と微妙に調和するような心情と感性の持主でなくてはならない。しかし，結婚は一方に，一種の自己放棄であり，自分のすべてをあたえることを意味する。強靱な自己をもち，かつ自由と独立という大義の信奉者である Isabel には，そのような結婚の意味が，彼女の理想とは抵触するように思われる。このように Isabel の見解は極めて，観念的な理想主義であるが，一方，彼女の心の深いところには，自己放棄の願望も存在するのである。

Deep in her soul—it was the deepest thing there—lay a belief that if a

certain light should dawn she could give herself completely; but this image, on the whole, was too formidable to be attractive.

彼女は，自分が信じうる理想的な何ものかに対しては，すべてをあたえて悔いないという献身的な精神がある。結婚に関しても，彼女は，真に自分を納得させるような，相手でない限り，自己を片鱗たりとも許すことが出来ないのだが，逆にいえば，完全な自己放棄を望むが故に，自己の独立自存をかたく守っているのだといえる。この自己放棄の願望を，肉体的な情熱と解釈する批評家もあるが，Isabel を終始，純潔な女性として描くことを望んだ James は，極めて婉曲な，微妙な表現で，情熱の所在をほのめかすのみで，むしろ母性的な自己奉仕の形で実現させている。Isabel が，Goodwood を拒否しつづけたのは，彼の直情径行な情熱への反撥が，大きな動機となっていて，自己放棄の願望は性的情熱には反応を示していない。一方，彼女が Osmond をえらんだ動機の一つは，彼の求愛がひかえ目で，彼女のプライヴァシーをおかさず，情熱の表現によらず，彼女の人間への敬意という形をとっていたからである。また，Isabel の自己放棄の願望は，無一文で無力な Osmond に，自分及び財産をあたえることによって，彼に自己実現の翼を得させたいという精神的願望として現わされるのである。

Isabel が Goodwood を拒否する理由は，むしろ簡単明瞭である。彼女は，Goodwood の人間的誠実さや，有能さをみとめながら，感覚的に反撥せざるを得ないからである。彼の地方人らしい粗野さ，武骨さ，鈍重さが，彼女の感性には重荷である。彼の容貌，服装，物ごし，口のきき方まで，彼の性格を一精力と，強引な意志と，攻撃性とを表現していて，彼女の自由への直接な圧迫としてうけとられる。彼女は，こうした感覚的な不快感は，もし愛情があれば，ある程度解消するものだということを知っているが，彼の印象が，"easy consonance of deeper rhythm of life" の欠如を示しているからには，彼女の拒否はそれだけで十分なのである。

彼女が Warburton 卿を拒否した理由はより知的，合理的である。彼の貴族という身分と生活様式は，彼女には全く新奇なものであり，根づよい伝統をもった貴族社会の秩序とシステムは，彼女のそれと適合することは困難である。このような特殊な生活圏に引きいれられることは，彼女の自由の観念とは相いれないものであるとして，彼女は個人的には，Warburton 卿を好もしく感じながら，その人格や教養の魅力にも自分を譲ることが出来ない。彼女は Warburton 卿と個人的に知り合うには余りにも日も浅く，拒否の理由は，環境と生

活のシステムがちがうという抽象的な理由である。Warburton 卿は，このような Isabel の観念性を次のように抗議する。"Do you know I'm very much afraid of it—of the remarkable mind of yours?"

要するに Isabel が，二人の男性の求婚を斥けた理由は，Goodwood の場合は性格的な，Warburton 卿の場合は社会的な意味で，彼女の自由の理想に抵触するという，一見合理的な理由である。Isabel は生来知的傾向がつよい上に，New England という禁欲的な環境に育ったため，心情の問題に関しては未開拓な，無垢な女性として描かれている。従って男性の求愛に対して，無情にもドライにならざるを得ない。彼女にとっては，自分で納得のゆく論理やシステムをもった観念の世界に頼ることの方が，より安全なのである。しかし，彼女が Warburton 卿を前に求婚をことわる会話は，彼女の人生観を表現するものとして注目に値いする。

> "I'll tell it you after all. It's that I can't escape my fate."
>
> "Your fate?"
>
> "I should try to escape it if I were to marry you."
>
> "I don't understand. Why should not that be your fate as well as anything else?"
>
> "Because it's not," said Isabel femininely. "I know it's not. It's not my fate to give up—I know it can't be."
>
> "Do you call marrying *me* giving up?"
>
> "Not in the usual sense. It's getting — getting — getting a great deal. But It's giving up other chances."
>
> "Other chances for what?"
>
> "I don't mean chances to marry."

Warburton 卿は，自分と結婚することが何故，何を放棄することになるのかという疑問を抱く。これに対して Isabel は，自分が放棄するのを恐れているのは，Warburton 卿以外の人との結婚の機会ではないと言明して，次のようにいう。

> "I can't escape unhappiness," said Isabel. "In marrying you I shall be trying to. . . . I'm not bent on a life of misery. I've always been intensely determined to be happy, and I've often believed I should be. . . But it comes over me every now and then that I can never be happy in any extraordinary way; not by turning away, by separating myself from life. From the

usual chances and dangers, from what most people know and suffer."

この会話における Isabel の言葉は，社会的身分のちがいという拒否の理由を，表面的な，あえて合理化されたものと気づかせるような，Isabel のより性格的な理由を示している。これらの言葉には，物語の後半における彼女の運命の暗示があり，さらに，彼女の性格と，多難な運命との間にある決定論的な因果関係の暗示がある。Isabel が前途にえらぼうとしているのは，Warburton 卿が提供する，申し分のない結婚の幸福，従って，努力を要しない安易な幸福をこえた何ものかである。彼女が人生に期待しているのは，あまりに容易にえられる目前の幸福ではなく，かえって艱難や，苦悩を前提としてしか得られない何ものかである。James は，ここで Isabel を彼女の運命の予言者としている。彼女が予言者たりうるのは，彼女自身の中に，運命の鍵があるからである。彼女は，他人の意志に左右されることを嫌う，強大な自己を持ち，安住することの出来ぬ精神の持主である。彼女は，自分のえらぶ道は，変更することの出来ない運命の道となることを自覚しているのである。彼女の意味する運命とは彼女自身の内心の掟に従ってえらぶ人生であり，それがたとえいばらの道となっても，判断しないよりは，間ちがった判断をした方が名誉だと考える Isabel にとっては，Warburton 卿の情にほだされて，結婚の祭壇へすすむよりはよいのである。無論，彼女は幸福をねがわぬどころではなく，extraordinary な幸福をさえねがっている野心家なのだ。彼女の自己発展の夢は，Warburton 卿をこえて，さらに大きな人生にむかってひろがり，彼女の自己教育の志は，より厳しい試練の道を求めている。彼女の語る言葉は，人間の徳とすべきことは，目前の安易な幸福を得るよりは，究極の目標を出来るだけ遠ざけ，より多くの人生の模索をとおして，これに到達しようとする努力そのものであって，究極の幸福は，その道程にある危険や困難をこえてしか得られないであろうという，求道的な受苦の精神を物がたっている。幸福の夢は，自由の夢と同様，人間の努力や向上心をかき立てる刺戟にすぎず，現実的な意味での extraordinary な幸福などというものはありえない。しかし，人はしばしば，現実的な意味の幸福をうることが不可能だとさとった時に，案外より高い次元の幸福に近づいているものである。そのような幸福を見いだすためには，Isabel にもより多くの人生のまわり道が，より多くの苦悩と忍耐の時が，そしてそれから得られる叡智が必要なのだ。James が彼女に言わせている言葉には，このような彼の声がひびいているように思われる。少くとも James は，人生の広さを教

えるかも知れぬ幸福よりも，人生の深さを教えるものとしての苦悩の意味をより多く知っていたのだ。もし，そういう解釈が妥当ならば，この作品の結末でIsabelがGoodwoodの求愛をふたたび拒絶して，Osmondのもとへ帰るという，問題の行動も，作品の終った先で，Isabelが，自己と，Osmondによって代表される環境を超克して到達するかも知れない，肯定的な世界の可能性を暗示することになるであろう。

しかし，この会話にあらわれたIsabelの考えは，依然として観念的で，現実に即応する融通性を欠いている。もし，Warburton卿の属する貴族階級のシステムと，自分のそれとの不一致ということが，彼女に不満や挫折をもたらす要因であるならば，Warburton卿との結婚をえらんだ所で，彼女の受苦の精神はその環境できたえられ，満足させられるであろうし，究極の幸福にいたる道は，そこにも見いだされるのではないかと考えることも出来るからである。

この場面で，私どもはIsabelの中に，内心の要求に忠実であるためには，目前の幸福を排することを辞さぬ，求道的な唯我主義者の面影を見ると同時に自己の確立のためには，人生の冒険や，それに伴う苦難を予想して，これに立ち向おうとするIsabelの能動的な姿勢のなかに，勇敢で，禁欲的なアメリカの開拓者たちの精神的血統を見いださないであろうか。

以上のようなIsabelの肖像は，Jamesが心に抱いていたMinny Templeのイメーヂを彷彿させるものがある。彼はGrace Nortonへの手紙で，Minnyの個性を次のように描き出している。

> 彼女は安住出来ぬ精神の持主でした。本質的に「非妥協派」の人だったのです。そして，もし老年まで生きながらえるとしたら，彼女が絶えず抱いていた大きな夢や不満にもてあそばれ，その犠牲となって生きることになったであろうと思われます。その上，最後の年には，彼女は大変な苦難の生涯を送ることになろうということがはっきりしてきたのです。彼女の生は，青春の生命を断ち切ってしまった死よりも，思うだに辛い（少くとも僕には）苦難の生涯となったのでしょう。僕は彼女を知り得たことによって，智慧を与えられたと感ずるのみならず，実際考えてみれば，彼女が今完全な平和と安息の中にあることを知って幸福なのです。彼女の一生は一つの骨の折れる，熱烈なといってもいい程の大問題であったのです。それに対して，少くとも僕の精神は，答のヒントを考えてあげるだけの力に欠けていました。[7]

この作品が未解決で終っているように，JamesはIsabelをとおして，Min-

ny の一生の大問題に解決をあたえてはいない。が，James が Minny の性格のなかに予見した悲劇的な一生のドラマは Isabel によって肩代りさせられ，実現されているのである。 (1965. 3)

附記 ： この小論は，東京女子大学「英米文学評論」第十三巻第一号に記載された「*The Portrait of a Lady* における受苦の精神について」の前篇として併せ読んで頂きたい。

註

1. Joseph Warren Beach, *The Method of Henry James.* pp. 35ff.
   Cornelia Kelly, *Early Development of Henry James*, pp. 293–295.
   F. R. Leavis, *The Great Tradition*, pp. 79–125.
2. Nation, xxxiv. pp. 102–103.
3. Letter to James. June, 1869.
4. Letter to his mother. March 26, 1870.
5. Letter to William James. March 29, 1870.
6. Unpublished letter to Grace Norton. L. Edel, Introduction to The *Portrait of a Lady*, p. xiv. Houghton Mifflin Company, 1956.
   F. O. Matthiessen, *Henry James*: *The Major Phase*, p. 49.
7. Unpublished Letter to Grace Norton. F. O. Matthiessen, *Henry James*: *The Major Phase.* p. 48.